

Fons

89

No. 2020年9月25日発行
 常陸太田市フォンズ・ネットワーク事務局
 常陸太田市生涯学習センター内
 〒313-0061 茨城県常陸太田市中城町3280番地
 TEL:0294(72)8888 / FAX:0294(72)8880
 Webサイト: <https://hitachiota-fons.jp/>

美術室で思うこと

武藤 はるか

陶芸家の両親の影響もあり、幼い頃から絵を描くことが好きで、大学では油絵を専門に学びました。現在は、水戸の私立高校で美術教諭をしながら作家活動をしています。作品は抽象画のつもりで、「肌触り」や「匂い」や「線」や「色」など日々感じた事を日記のように表現しています。

昨年の夏、銀座のギャラリーで展示をしていると、いきなり作品の前で、初対面で名前も知らないおじいちゃんに、「あなたは自然が豊かな所で、美味しい物を食べて、のびのび育ったんでしょう」と言われたことがあります。「出身は茨城県の常陸太田市です」と答えると「そうか、そうか。伝わってくるよ」と。この時何だかとても嬉しくてはじめて故郷というものを意識しました。薪の燃える匂い、野ざらしの鉄屑、畑の筵や轆山にかかった霧、無意識に私が心地よいと思つて選ぶ形や色は、心象風景でもある故郷の風景がベースであり、それが美意識として私の中にあるのだと思います。

中学生の頃、美術部として板谷坂や梅津会館をスケッチした思い出があります。構図やパースが難しく、四苦八苦していました。昨年美術部顧問として生徒と一緒に、たくさんの方にご協力頂きまして、鯨ヶ丘商店街で制作合宿を行わせていただきました。板谷坂を描く生徒を覗いて嬉しく思いつながら、アドバースにまた悶々となりました。私にとっては懐かしいけれど新しい発見がある場所、それが常陸太田市です。新型コロナウィルスの影響で次々に展覧会が延期され、発表のあり方や制作の意味を考え直す日々ですが、これからも生徒と一緒に作品を作り続けていきたいと思っています。

自分自身の表現として芸術の道を選ばれたわかものたち。
常陸太田に縁のある若手芸術家の今をご紹介します。

漆芸家

菊池 麦彦 さん

漆芸家菊池麦彦さんは、母方のご実家が常陸太田市水府地区にあり、二〇一四年に「麦工房」を構え、常陸太田での活動が多くなりご縁が生まれました。



乾漆「空まめ」

子どものころから工作が好き

で、自然とものをつくる道を目指していた菊池さんは、美術科・工芸コースのある東北芸術工科大学で漆芸を学びました。卒業後美術科の予備校で講師を務めつつ作家として活動をはじめ現在に至ります。

菊池さんの作品を見てみると

漆器という概念がおおきく広がっていく風の流れを感じます。美しいが高価で、実用の道具からは離れつつある漆器が、釣りのルアーやキャンプの道具として、また不思議な形状のスピーカーとしてその特性を活かしつつ新しい輝きを見せているからでしょうか。アウトドアの道具と漆器、一見何のつながりもないような両者は菊池



「Piedra Speaker (ピエダスピーカー)」



漆塗り釣り道具「ルアーボックス」



アウトドア漆器「kiik mug」

さん自身の「好きなもの」でつながっています。釣りが大好き、必然的にキャンプも大好きな菊池さんは、アウトドアで使う道具に自身の作品を取り入れ、生み出される道具のサイズ感や使い勝手がベストマッチとしてアウトドアの世界でも評判を呼んでいます。

自然素材の塗料としての漆の魅力・可能性に惹かれているとご自身が語るように、作品の色合いもいわゆる漆器のイメージを心地よく覆してくれるのです。伝統工芸の伝統という意味は、時代に沿って新しく作り変えられてきたことの流れを意味するのだと、伝統の先端にいる菊池さんの作品を見ていると感じます。

お知らせ!

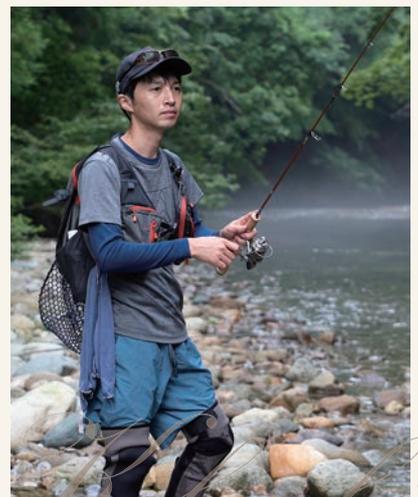
「麦工房展」
会期：2020年10月16日(金)・17日(土)・18日(日)
時間：10:00～17:00
会場：麦工房(常陸太田市天下野町4788-1)

年に一度の麦工房展です。
新作の作品や器を展示しますのでぜひお出かけください。

1985年 埼玉県さいたま市生まれ。2010年 東北芸術工科大学美術科工芸コース漆芸専攻卒業。茨城県常陸太田市に陶・漆工芸 麦工房を新設。2011年 常陸太田市に麦工房漆林を造成。2014年 さいたま市岩槻区に漆アトリエを新設。
受賞/卒業制作lure bag 優秀賞。日本漆工協会奨学賞。50回日本クラフト展入選。天賞堂時計文字盤コンテスト入選。
展示会/自由が丘古桑庵 二人展。浦和 楽風 二人展。常陸太田 麦工房 個展 毎年。新宿伊勢丹 壱木呂の会展。常陸太田梅津会館 壱木呂の会展。水戸 工芸ギャラリー-桃花堂 二人展。金沢 しいのき迎賓館 天賞堂時計文字盤展。青梅 釣具店甲州屋 和の釣り道具展。art space ar morgenrot。銀座ギャラリーおかりや 四人展。
奥久慈漆組合 組合員。NPO法人 壱木呂の会 理事。



Mugihiko Kikuchi Website
mum-urushiproducs.com



詩人・作家

神泉 薫 さん
しん せん かおる

舞鶴城のあとしめて——太田小学校校歌より

一枚の車窓から見える、青空と萌える緑。懐かしい水郡線に揺られて太田に帰ると、いつも雄大な美しい色が迎えてくれる。高校卒業後、上京し、大学で文学を学んだ私は、在学中に出会った詩の世界に魅かれ、文筆の仕事に入った。「詩の源泉は？」と、問われれば、幼い日々に触れた故郷の自然と答えている。四季折々の光、風、緑濃い山々。川のせせらぎ、田のあぜ道。世界と私を結ぶ詩作の根底



「てのひらいっぱい あったらしいな」(福音館書店)

にある生への信頼は、三つ子の魂が育まれた故郷、常陸太田が築いてくれたものだと思っていてやまない。

母校である太田小学校の校歌に「くじらが岡の片ほとり／舞鶴城のあとしめて」というフレーズがある。幼心に、今はない城の姿を見上げ、大空に飛ばたく美しい鶴を思った。そして、「瑞竜山や西山や／世にすぐれたる賢君の／遺徳かがやくこの土地に／生まれて学ぶうれしさよ」と、続くことばの響きに、柔らかな敬意を感じていたような気がする。

人間にとってことばは、生涯、大切なコミュニケーションの道具として在り続ける。人と人が繋がりを、学び合い、何かを創造するプロセスには、必ずことばがある。常陸太田という土地で交わすあいさつの素朴さ、優しさは、城下町の慎



最新詩集「白であるから」(七月堂)

ましやかな暮らしの歴史が、生み出しているものではないだろうか。健やかな人間性の基盤は、人と土地に育まれ、受け継がれ、命は続いてゆく。時折帰省する私は、人への優しさや温もりを大切にしているか、心に水はあるか、太田で覚えた「生きる姿勢」を自らに問う。変わらぬ町並みと風の匂いは、穏やかな審判として、いつも私に微笑んでくれる。

昨秋、ご縁があり、子育て支援施設「じょうづるはうす」で開催された「秋の子育てメッセ」に参加させて頂いた。故郷ですくすくと育つ子供たちの姿に、この上ない喜びを感じた。幼い日に歌った校歌が、再び胸に蘇る。「心をみがき身を修め／誉をあげよ 雲井まで」。新たな命の輝く未来は、太田の空、あの雲井まで、大きく広がってゆくことだろう。

ラジオ収録の様子



Kaoru Shinsen Website
www.shinsenkaoru.com

1971年 茨城県常陸太田市に生まれる。太田小、太田中、太田第一高等学校卒業後、玉川大学文学部英米文学科へ進学。在学中に、詩の世界と出会い、書き始める。2002年 中村恵美名義による第1詩集『火よ!』出版、第8回中原中也賞受賞。2004年 英訳詩集『Flame』(山口市)出版。2005年 中村恵美名義による第2詩集『十字路口』出版。2009年4月 筆名を中村恵美から神泉 薫へ変更。2012年 神泉 薫名義による第3詩集『あおい、母』出版、平成24年度茨城文学賞詩部門受賞(以上、書肆山田刊)。2014年 月刊絵本『ふわふわ ふー』(絵／三溝美知子 こどものとも 0. 1. 2. 福音館書店)出版。2016年3月より常陸太田大使に任命される。2017年7月より 調布FMラジオ番組「神泉薫のことばの扉」、「神泉薫 Semaison 言葉の庭へ」など、パーソナリティー。2019年4月 第4詩集『白であるから』(七月堂刊)出版。2019年12月 月刊絵本『てのひらいっぱい あったらしいな』(絵／網中いづる こどものとも 年少版 福音館書店)出版。日本文藝家協会会員。神奈川県在住。

Kaoru Shinsen

ヴァイオリニスト

牛草 春 さん

常陸太田市の思い出

六歳の時に東海村から常陸太田市に家族で引っ越し、佐竹小学校、峰山中学校に通いました。

引っ越した当初人見知りが激しく、学校に行きたくないと両親や先生方を困らせた事もよくありました。その時担任の先生や二つ上の姉の担任の先生まで気にかけていただき、泣いている私が教室に入りやすいようにと試行錯誤してくださった事に今でも感謝しています。

中学時代はヴァイオリンに熱中し始めた時期だったので練習時間を確保することが大切でした。峰山中学校の先生方はとても良く理解してくださっていて、例えば必須だった部活動も無理のないようにと配慮してくださりました。そうした小中学校の先生方のご理解が無ければ今のようにならなかつたと思います。

高校から東京での寮生活になりましたが、高校時代はほぼ毎週末常陸太田の実家に帰っていました。東京からの高速バスに乗り窓の外を眺め帰省

するとだんだん見なれた常陸太田の景色が見えてきてそれだけでホッとした事を覚えています。

ヴァイオリンの練習・演奏で

一番大切にしていることは

何でしょうか？

練習している楽曲や作曲家の背景を研究することによってより深い理解が生まれ新しい発見や勉強ができるので必ず同じ作曲家の違う楽曲を聞いてみたり、他の演奏者の方がどのように演奏されているかコンサートに向いたりします。また天気や湿度で楽器の音色が変わるので毎日楽器と対話するように練習をしています。子どもを出産した後はなかなか練習時間と気力を確保する事が難しいのですがそれでも毎日続ける事を心掛けています。

演奏の際は音楽を楽しむ気持ちを大切にしています。それまでの練習では自分のできていない部分を厳しい気持ちを持って何度も練習しますが、演奏の際は真逆で自由に泳ぐような気持ちで演奏しています。お客様と一緒に音楽の波に乗って同じ空間を共感できる瞬間を味わえた時は本当に素晴らしい感覚です。演奏後の皆さまの顔を見ると同じような気持ちでいてくださっているような気もして嬉しくなります。

——ご帰国なさる際に地元での演奏会をいつも計画してくださっていますが、それはどのような思いでご計画なさっているのでしょうか？

常陸太田での演奏会は特にお客様と気持ちが通じ合える機会が多いような気がします。小中学校で世話になった先生方とは今でも交流があり、演奏会の後にお話しできる機会も多いのです

が感想や励ましのお声を頂けると、またここで演奏したいと思う気持ちが強くなります。常陸太田には梅津会館やパーティホールなど、素敵な場所や伝統的な建造物がたくさんあります。演奏が実現していない歴史的な建築物などまだまだ興味深い場所がたくさんあるので今後演奏してみたいです。

——地元の子どもたちに向けてのメッセージ

たくさん物を見て「今これが見たい！楽しい！」という自分だけの感覚を大切にしてください。そして思い切り楽しんで欲しいです。私自身、幼少期に自分の好きなものが見つかった事をすごく幸せに感じています。プロになるといふ事は大変な道のりですが何か自分の大好きな事がひとつでもあると人生が豊かにもっと幸せになるのかな、と私は思います。



1993年春発表会 (6歳)
(東海文化会館)



Haru Ushigusa Website
haruushigusa.com

常陸太田市出身。5歳よりヴァイオリンを始め、現在までに平林朋子、磯野順子、宗倫匡の各氏に師事。ピオラをJames Sleigh、室内楽をMartin Outramの各師に師事。桐朋女子校等学校音楽科卒業、同大学入学後2007年に渡英、ロームミュージックファンデーションより奨学金を得て英国王立音楽院学士課程、修士課程を最高位で卒業。現在はロンドン在住、日本とイギリスにて演奏活動を行う。

2014年茨城県新人演奏会、新人賞聴衆賞受賞、2015年茨城の名手名歌手たち出演。仙台フィルハーモニー管弦楽団、英国オーピントン交響楽団、英国ノースダウンズ管弦楽団と共演。これまでに王室プリンス・エドワード王子の前で演奏するなど演奏活動に力を入れている。

Haru Ushigusa

うるし作家

黒沢 理菜 さん

——常陸太田市の思い出

常陸太田には坂道が多かったの
で、坂の思い出が多いです。通った幼
稚園のそばに坂道の道路がありま
すが、通っていた時にはまだ道路で
はなく、土と草があつたように思
います。そこでヤマゴボウ(当時はヤマ
ブドウと言うのだと信じていまし
た)をとり、色水を作りまし。中
学に通う時には、家を出てから一度
下るのに、校門までの道が上り坂に
なっていて、重い荷物を背負って歩か
されることに理不尽を感じていま
した。図書館に行くことが好きで、
特に人が少なくなる雨の日にわざ
わざ、勉強したり本を読むため
に行っていました(そうクラスで発表す



漆塗り「球体関節人形」

ると後ろの席の女子に「暗っ」と言って
笑われました)。図書館へは、かなり
急で細く鬱蒼とした坂道を下るとす
ぐでした。坂道の途中には古井戸が
あり、水の流れる音がしていました。

——漆を学ぼうと思ったきっかけ

実家が音楽教室を経営しており、
私もピアノを習っていました。別の選
択肢を探したくて県内一の進学校に
進み、ある時やめました。その後自分
に他に何の可能性があるか考えて、美
術が得意だったので美大を受験しよ
うと考えました。初めはイラストレ
ターになろうと思ひ、デザイン科を志
望するつもりでしたが、京都芸大の大
学見学にて漆芸の存在を知り、そこで
受験を決めました。

——ピアノの作品を

作ろうと思ったきっかけ

音楽をやめると決めた時想つたの
は、これまで両親がかけてくれた時
間、手間、お金のことでした。また、自
分にはそれしかないと思って暮らして
きた時間のことを思うと、果たして

自分に他に何があるというのか、
途方に暮れました。芸術の道に進
んでからも、たびたびそういう思
いが頭をよぎりました。ピアノの
作品は、それらの思いと向き合う
ために制作を決めました。

制作には二か月ほどかかりま
した。ほとんど毎日、六〜十時間
程度作業をしたと思います。漆は
湿度と温度がないと硬化が始ま
らないので、季節は冬、底冷えする
極寒の京都、さらに暖房設備もろ
くない部
屋での作
業は、漆を
乾かすの
も一苦勞、
体もとて
も辛かった
です…。



「ピアノ作品」常陸太田市民交流センター(パーティホール)

——作家としての活動は

今後どのように

作家としての活動は、ひとまず最低で
も年一回の発表を目標としております。
今現在は漆塗りの球体関節人形を作る
ことに凝っており、人の感情の救い手
として制作しています。



@riinakurosawa
instagram

1992年 茨城県生まれ。2016年 京都市立芸術大学美術学部工芸科漆工専攻 卒業、京都市立芸術大学大学院美術研究科工芸専攻 卒業。

個展／2017年「感情をなぞる」(SUNABA GALLERY)、「ひかりの燈」(KUNST ARZT)。2019年「夢のいりぐち」(大雅堂ギャラリー)。2020年「みず色の隙間」(ギャラリー恵風)。グループ展ほか／2015年 奥久慈うるしと苧木呂の会展(常陸太田市梅津会館)。2016年 京都市立芸術大学 作品展(京都市美術館) 奨励賞受賞、漆芸の未来を拓く 生新の時 2016 (石川県輪島漆芸美術館)、京都市次世代工芸展(京都市美術館別館)morgenrot賞受賞。2018年 グループ展「漆に寿ぐ」Art space morgenrot、京都府新鋭選抜展(京都府京都文化博物館)、アンスティチュ・フランセ関西賞、日本経済新聞関西支社賞、京都市立芸術大学修了制作展 大学院市長賞。

漫画家

大内 優 さん

——マンガとの出会い

大学の授業で雑誌を作るというテーマが与えられ、雑誌を作成する。その中で、マンガを描いてみたところ、ぜひ続きを読みたいと反響が意外に多かった。自分は、そんな反響が嬉しく続きを描いてみたいと思うようになった。

現在WEBマンガで連載中の「みどり晴ればれ」は、茨城県とくに常陸太田市の街並みや地元の商店街や居酒屋、道の駅ひたちおおたを描いています。作成は、PCで行っており原画は多くはありません。マンガ作成には、取



くらげパンチのWEB漫画「みどり晴ればれ」
単行本も新潮社パンチコミックスから2020.9/9より出版
「人の為に生きるって素晴らしいよね?」自分の心を偽り、人の為に生きてきた根本緑、31歳。心身ともに限界に達した彼女を救ったのは、一粒のミニトマトだった……。

「初連載におどしていますが、栗原陽平先生、二宮裕次先生、坂本拓先生、町田翠先生と出会えたおかげで頑張る事ができました。本当にありがとうございます。小さな畑を借りたので、穫れたて野菜をいつか読者の皆さんにおすそ分けしたいです。よろしくお願いします」1983年 生まれ。常陸太田市内田町出身。子どものころから絵を描くことが大好きで、高校卒業後美術の予備校に通い始めると絵の才能はメキメキ上達し、多摩美術大学の造形学部デザイン科に入学。2014年 第66回ちば賞「ヲタヤン小林」でデビュー。「Dモーニング」(講談社)で『農業ツバメ』、「月刊スピリッツ」(小学館)で『大沢居場所なし』『よせる男』など読切掲載。

材や経験が大切でそのような対策が臨場感に一役買っている。この漫画では、女性主人公根本緑が茨城県で農業に關わっていく様子を描いています。都心で働く女性が、現代社会のさまざまなストレスに悩んでいる時に、農業に出会いいます。そんな農業を通じて手作業handを行い、頭でheadで考え、健康helathになり、癒しhealを感じるまさにビタミNHの作品です。さまざまな自身の問いかけに自身の成長を描いている人間らしさhumanityの漫画でもあります。農業を熱心にならざる高校生ヤンキー畑穰という登場人物が、さまざまな「きづき」を展開していくのもこの漫画の魅力です。

——マンガとは

マンガを描くことは自分自身のことであり、マンガと共に成長しているのが良くわかります。

——マンガ家を目指すみなさんへ

やりたいことはとことんやった方がいい、力を出しきらないで、あきらめていった人をたくさん見ました。勿体ないと思った。続けていくと自分を信じてくれる人が増え、自身の自信に繋がります。



Su Cuchi



出本の
思い絵

『てぶくろ』

岩本 昌也（白羽町）

心に残っている絵本は？ 妻に聞かれて一番先に浮かんだのが「てぶくろ」五十六歳にして改めて読む。…五十年ぶり？ やはり名作だなと改めて思う。

雪が降り続ける森の中で起毛の暖かそうなてぶくろが、片方だけ落ちていた。そこに森で暮らす動物たちが次々と中に入り暖を取る。はじめに入る動物はカエル。その次にネズミ。ここまでは違和感がないのだが三匹目に登場する動物はウサギ。そのあとキツネ・オオカミ。最後は熊。序盤のカエル、ネズミで



文化の泉

大正琴教室微風会

「取材」黒羽 文男

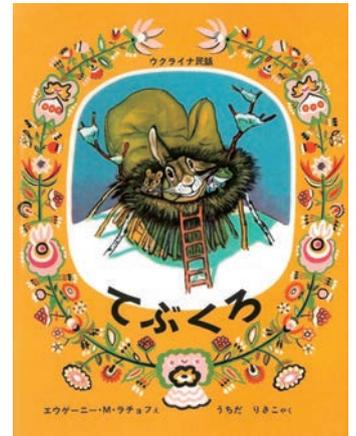
大正琴教室微風会は、生涯学習センターで開催された大正琴教室がきっかけで二〇〇二年、サークルとして活動を始めました。サークルの活動はデイサービス、老人会、小中学校などでの演奏会です。訪問した先では、演奏を聴いていただき、一緒に唄を歌ったり、実際に大正琴にふれていただく体験などです。大正琴を通じて少しで

サイズ感がフィットしているてぶくろに少しづつ大きめの動物が登場してくるのだが、あまり違和感なく読み続けていたと思う。画力の素晴らしさに尽きる。写実的なのに動物たちの表情も豊か。おおかみの狡猾な顔は、読み続けていて中に入っている動物が食べられるのでは？ とハラハラしながらページをめくっていた記憶が蘇った。孫ができたら間違えなく読み聞かせると心に決めている名作である。

…余談だが、同僚の子ども（幼稚園児）が物語を作ってくるように宿題を出されたらしい。その子の物語が秀逸。むかしむかし、ウサギの家族がおりました。そのウサギの家族はとても貧乏で、おかあさんウ

も楽しい時間を感じて過ごしていただける事が、私たちの活動の誇りを持てる瞬間です。

大正琴の魅力は、音色と響きがとても良い事です。月二回萩谷先生の指導をいただき練習を重ね、一つでも多くの曲が演奏できるように頑張っています。練習した曲が弾けるようになりますと、とても幸せな気持ちになります。私達のボランティア活動には先生も協力的で会員と一緒に掛け付けて行き演奏をしてくれ、とても家族的なサークルです。



サギとおとうさんウサギは、毎日お金がなくて困った困ったと話していました。でも、もう安心です。なぜなら来月になると給付金があるからです！ というお話。聞きながら爆笑してしまったが、こどもはしたたかに親の行動を見ているのだと肝に銘じた。



人員構成／9名 活動日／毎月第1・第3金曜日
活動場所／小島町・工芸交流センター楓
活動費・年会費／1,000円／月
連絡先／大内照代 0294-76-3771
常陸太田市教育委員会文化課 0294-72-3201

これからの目標は、練習を重ねレパートリーを増やし、そして仲間を増やし、あと七年後の三十年記念コンサートができるよう頑張っていきたいと思っています。

常陸太田の地名話

32

和田『常陸太田市和田町』

川松 博

『小野崎通貞文書』に和田城での合戦の戦功が記されていて室町時代からみえる地名。

『茨城地名大辞典』によると、「和田」という地名には二つの説があるという。

「ワダ」には河川の屈曲した所にある平地の意味があり、川が曲がった所、曲がって水がよどむ所とある。

もう一つは、輪廻が訛って「わた」が語源という説である。周囲を山で囲まれた平地や河川の曲流部にあたる地形をさすという。

実際、近くを山田川が流れている。河川改修以前は、この和田付近で山田川は大きく蛇行しながら流れていたため、洪水がしばしば発生したとされる。『水府村史』

このことから、「和田」は「輪田」の意味で、川の流れに囲まれた水田が地名になったと考えられる。「和田」の地形からみても、この二つの説は的を得ているように思う。

稲荷神社は、もとは和田家の氏神であったが、元禄年間に徳川光圀公によって村の鎮守とされた。



和田町の鎮守稲荷神社

＜参考文献＞
「新編常陸国誌」「茨城県地名大辞典」
「地名語源辞典」「水府村史」

※お知らせ
「ちよとひといき」「ほつとひといき」は、都合によりお休みいたします。次回をお楽しみにお待ちください。

新太田点描 24

木村謙次

現今、国家的な課題の一つとなっている事柄にロシア国が占拠している千島四島の返還問題がある。千島列島のうち歯舞・色丹・国後・択捉の四島は、安政元年（一八五四）十二月、日露和親条約により日本の領土として確定した。

これより以前、蝦夷地と呼ばれていた現在の北海道の各地では、南下政策をとるロシア国と交易や国境を巡り度々トラブルを起こしていた。

このため徳川幕府は領土及び国境を確定させるため、寛政十年（一七九八）幕臣の近藤重蔵を責任者とする調査団を蝦夷地に派遣した。

この調査団の編成に際して、彰考館総裁の立原翠軒から推薦を受けて一行に加わったのが天下野村（現・天下野町）木村謙次である。

これは謙次が寛政五年（一七九三）に勝倉村（現・ひたちなか市）の武石民蔵と蝦夷地探検を経験しているという実績からであろう。

幕府の調査団へ参加するとき謙次は、何らかの事情からか「下野源助」と変名している。が、調査団の実質中、心的な存在だったと云われている。

さて、蝦夷地を経て千島列島へ渡航した一行は択捉（えとろふ）島と得撫（ウルップ）島との海峡をロシア国との国境として択捉島端に『大日本恵登呂府』の標柱を立てている。この時、標柱に揮毫したのは謙次である。

木村謙次は宝暦二年（一七五二）、天下野村

に生まれた。諱は謙、字を子虚、通称を謙次と云い、礼斎、愚鈍と号し、変名を下野源助と称した。幼少の頃から東金砂山東清寺の大雲和尚のもとで読書に勤しみながら勉学に励み医学を谷田部東壑に、儒学を立原翠軒に、そして地理を長久保赤水に学んでいる。次いで謙次十九歳の時、東壑の師で京都の名医吉益東洞に入門し修業を積んでいる。

その後、修業を終えて帰郷するも間もなく水戸に出て、安永四年（一七七五）十月には立原翠軒の紹介で水戸藩医の原南陽にも入門している。その頃から医業活動の傍ら次第に北方蝦夷地への関心を持ち始め、奥州地方や蝦夷地を探検旅行していたことが調査団員に選任された所以であろう。

この蝦夷・千島探検旅行から帰った謙次は、心中にロシアからの外圧、脅威を抱きながらもあまり積極的な行動はとらずに、水戸藩の農政や民政に関心を寄せながら、近在・近郷の人々や太田地方の有志や知識人と交流を深めていった。

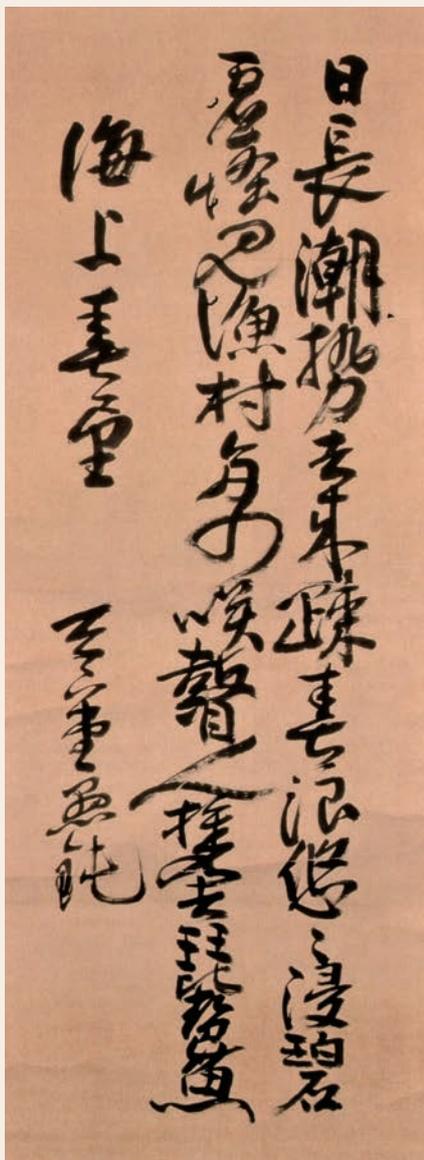
文化八年（一八一二）七月、数多くの活動実績とエピソードを残して謙次は天下野村の自宅で瞑目している。享年六十歳。墓は同村の万城内にあり墓碑銘の撰文は師立原翠軒によるものである。

ところで、謙次が地元へ持ち込んだもの一つに凍蒟蒻の製造伝授がある。これはかつて京都遊学中に京丹波地方で凍蒟蒻が製造販売されているのを見て、その製造方法を学び天下野村に帰郷してから地元で農民たちに奨励したという。これは今も丹波流凍蒟蒻として受け継がれている。

ここで左に掲げた『海上春望』と題する一幅の書は「天下野愚鈍」名である。謙次の人柄そのものの何とも大胆且つ剛毅に感じ取れるのは私だけであろうか。

（付言）竹島問題に絡めて高萩市では長久保赤水を大いに顕彰しているが、それに比べて常陸太田市における木村謙次の顕彰はどうだろうか？ サツパリである。嗚呼！

（吉成英文）



（ひたちなか市 大山富彌氏所蔵）